

VERITAS vos liberabit



鹿児島純心女子
大学附属図書館報
第8号(No.8)
編集:図書館運営委員会
発行日:2019.3.14

特集 時を読む

図書館報名「VERITAS vos liberabit」は、ラテン語で「真理はあなたたちを自由にする」(新約聖書ヨハネ福音書8章32節)という意味です。

contents

巻頭言	1
図書館長 岡村和信	
Book Review	2
川上 典子 石崎由美子	
本と出会う	3
小湊 博美 藤田千鶴子	
Book Review	4
(こと文4)宮野ころこ (看護1)木山良菜 (こども3)寶藏彩恵 (健栄2)迫田 瞳	
USER'S voice	6
(大学院)草留早紀子	
寄贈図書案内	
シリーズ	7
図書館長の冒険 純心アートギャラリー	
お知らせ	8
編集後記	

■巻頭言

図書館長 岡村 和信

今年ももうすぐ桜の開花の時期がやってきます。待ち遠しいですね。桜と聞くと思い出す句があります。それは「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」という句です。これは「花も人も散りどきを心得てこそ美しいのだ」という意味なのですが、この句は細川ガラシャの作で、彼女の辞世の句とも呼ばれています。細川ガラシャは、本能寺の変により織田信長を倒したあの明智光秀の娘で、細川忠興の奥さんにもなった人です。彼女は洗礼を受けましたので洗礼名がガラシャ、本名は玉または玉子といえます。ちなみにこのガラシャということばは、ラテン語のGratia(グラティア)から来ています。意味は「神の恩寵」です。英語ではGraceに当たりますが、Graceには「神の恩寵・恵」のほかに「優雅さ・気品」という意味もあります。ガラシャ夫人は信仰心の篤い、優雅さと気品を備えた、壮絶なしかし立派な最後を遂げた女性です。さてガラシャのこの辞世の句に戻りますが、この句の「時」というのはおそらく死ぬ時のことだけを言っているのではないと思います。何事においてもふさわしい時があるということ、つまり、この世の中すべてのことには最もふさわしい時期や場合があるのだということです。ガラシャはこの句を読んだとき、聖書の「コヘレトの言葉」を意識したのかもしれませんが。「コヘレトの言葉」には：
何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時／植える時、植えたものを抜く時／殺す時、癒す時／破壊する時、建てる時／泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時／石を放つ時、石を集める時／抱擁の時、抱擁を遠ざける時／求める時、失う時／保つ時、放つ時／裂く時、縫う時／黙する時、語る時／愛する時、憎む時／戦いの時、平和の時。

このように「コヘレトの言葉」3章では、すべてのことには「時」があるということが切々と綴られます。もちろんその中には残酷な「時」もあります。「時」に翻弄されながら、人はわめき、憎み、争いながら生きていくこともあるのです。しかし「時」があるというのは、その最も適切な時にやるべきことを行いなさいということでもあると思います。一般的に冬に種を蒔いても芽は出ません。春に種を蒔いてこそ、秋に刈り取ることができます。

学生の皆さんは今学びの時にあり、求める時、チャンスをつかむ時の中にあります。皆さんが今ここで、この大学で学んでいるのは、自分の教養を高める理由もあるでしょうが、将来の自分のために、自分がやりたいことを成し遂げるために学んでいる人も多いと思います。今私たちはひとりひとりがどのような時の中にあるのか考え、なすべきことをなす努力をしましょう。人が人として生きることが困難な戦乱の時代にあっても、人として一人の女性として自分の信念に従って「時」を生きる努力をした細川ガラシャのように。



Book Review



おすすめの本を紹介していただきました 《教員編》



『日日是好日：「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』森下典子著（新潮社）

図書館所在 1F文庫 791.04 MO

この本のタイトルにある「日日是好日」は茶室の床に掛けられた掛け軸の言葉で、禅語です。これを原作とした「日日是好日」という映画が、昨年亡くなられた樹木希林さんの遺作として放映されましたので見た人もいるかもしれません。希林さんが「お茶」の武田先生役、そこで「お茶」を習う典子役を黒木華さんが大変味わい深く演じ、本作品がかなり忠実に映像化されています。武田先生の茶室に通い始めた典子は、二十歳。自分の意志からでなく従妹に誘われたのがきっかけで、それから25年間通い続けます。お稽古では、「庭に面した静かな部屋に入り、畳に座ってお湯を沸かし、お茶を点てそれを飲む。ただそれだけを繰り返す」中でお菓子やお茶を味わうだけでなく、床の軸や花を観て、釜の音を聴き、炭のにおいを感じるようになります。先生からは「なぜでもいいからこうするの」とか「あっ、ダメ、覚えちゃ」とか言われながら、自分の手が自然に動くという感動を「定額預金の満期のように時々」、味わうようになるのです。典子がお稽古で感じる「なぜ」は頭で考え効率化を優先する現代の考え方ですが、自然を取り込み「感じること」や作法を大事にするお茶のお稽古は400年前の茶人

と繋がっています。この本は、忙しい現代人への生き方、学び方のヒントを与えてくれているように思います。

タイトルの禅語は、毎日「好い日」が続いてよいことだとか、そうあってほしいとかというような意味ではありません。晴れた日もあれば雨の日も、雪の日も、暑い日も、寒い日もあるのです。日々天気だけでなく私たちの身の回りで良いことも悪いことも起こります。テストで1番だったとか、財布を落としたとか、そういう日常で起こることに私たちは一喜一憂しますが、それらを含めて「好日」と言っているのです。筆者はお茶を始めて15年目の雨の日のお稽古で、この禅語の意味を理解します。「雨の日は、雨を聴きなさい。心も体も、ここにいなさい。あなたの五感を使って、今を一心に味わいなさい。そうすればわかるはずだ。自由になる道は、いつでも今ここにある。」その境地こそが好い日であるわけです。すぐには理解しがたい言葉ですが、時間をかけるとある時、軸の言葉がずんと落ちる瞬間があるのです。この本を通して「長い目で、今を生きる」という筆者のメッセージを茶道に興味がある人にもない人にも、届くことを願っています。

ことばと文化学科 川上 典子



『白洲正子自伝』 白洲正子（新潮社）

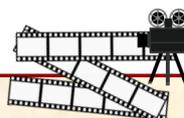
図書館所在 1F文庫 289.1 SH

最近になって、自分が経験できなかったような暮らしに興味を持つようになった。時代、空間など…。数年前に、東京都町田市の鶴川にある“武相荘”を訪ねたことがある。“武相荘”は白洲次郎と正子が太平洋戦争の始まる前にやってくるであろう食料難に備えて、移り住んだ東京の郊外にある茅葺の農家である。“武相荘”では、日々の生活に使われた器や着物、洋服、当時のままの次郎の書斎、車庫には年代ものの愛車、昔ながらの農機具が、展示されていたと記憶している。それから数年経った頃、鹿児島市内に「樺山、黒田、大いに語る」の観光オブジェが、鹿児島市高見馬場に突如あらわれた。“時標（ときしるべ）”というものらしい。“白洲正子の父方の祖父”樺山資紀”である。私は高見馬場の交差点で信号待ちをしている間に、観光客気分でのぞき穴から説明文を読んだ。「ああ…なるほど…」とわかったような気がしたがわかっていない。

今回手にした「白洲正子自伝」の表紙には、威厳のある御爺さんの膝の上にはいやいや抱っこされている白洲正子が

映っていた。この女の子はただ者ではないという顔つきをしている。読み進めていく中、この御爺さんにしてこの孫ありと思えるようになった。神奈川大磯の別荘近くの海岸で、御爺さんが「太平洋の水でうがいしよと気持ちよか。あの向こうにはアメリカ大陸があつとよ」とはるかかなたの空を眺めやりながら、鹿児島弁丸出しの口調で言っていたなど…。大恋愛の末、白洲次郎と結婚。彼は大正十年、中学を卒業しイギリスに渡り、大正十二年にはケンブリッジ大学に入学、戦後、吉田茂首相に請われてGHQとの折衝にあたり、その後日本国憲法の成立に深くかかわったとある。白洲正子の“度胸”、“人や物を見る時の世俗的な地位や飾りなどにまどわされない公平な目”は、万人が経験できない事を経験してきた事によって醸し出されてきているのではと思うのである。では、私たち凡人はどうすればいいのか…本を読む事もいいが、やはり多くの事を経験することではないだろうか…。

健康栄養学科 石崎由美子





本と出会う



読書という経験

藤田 千鶴子

本、あるいは「読むこと」にまつわる、思い出す限り最も遠くにある記憶は、まだ小学校へ上がる前、2歳年下の従妹が暫く一緒に暮らしていたときのことだ。ある晩、寝る前の「おはなし」の時間、いつものように自分で選んだ絵本を小脇に抱えて、姉や兄たちのいる蚊帳の中をふと見ると、従妹が別の絵本を母に差し出し、二人でそれを眺めていた。その途端、大抵の場合「おりこうさん」の私は猛烈に怒った。読むと決めていた絵本を抱えて蚊帳の中に入った私は、「お母さんは私のお母さんだから！」と泣いて訴えたい。その絵本が何だったのか、もう覚えてもいないが、皆と私を隔っていた蚊帳のことは、何故か今も心に残っている。

次に思い出すのは、「アルプスの少女ハイジ」。小学校2年生の私はすっかり夢中になり厚さ5センチを優に超えたと思われるその本を一気に（といっても2日かかったが）読んだ。一日目の夜、恐らく法事か何かだったのだろう、茶の間の炬燵には親戚たちが集まっていたが、部屋の片隅には、その日だ

け、丸い火鉢が置かれていた。にぎやかな話し声やいとこたちの走り回る喧噪の中で、私はその火鉢にくっついて読み続けていたのを思い出す。

以後は、ご多分に漏れず、面白そうな本を手当たり次第に読む乱読の時期が続いたが、文学だけでなく漫画もよく読んだ。所謂少女漫画が主だったが、中でも萩尾望都に惹かれた。家庭教師をしていた受験生から教えられた「リデル」（「ポーの一族」のなかの一編）、ほぼ同時期に友人から「今月のおすすめの一冊」と紹介された「トーマの心臓」に始まり、熟読した。勿論、手塚治虫ははずせなかったが。

自らが母となってからは、娘と共に読むbedtime storiesに始まり、書き始めるときりがないのだが、娘のためにお勧めの本を紹介していたのが、いつの間にか娘から紹介されることが多くなっていくことに気づく。

本は一人で読むものではあるが、こうしてみると、印象に残っている読書は本以外のものや人となつがっている。母と従妹を薄明かりの中で包み込むようにそこにあった蚊帳、火鉢の中で真っ赤に燃え、やがて白い灰になる炭。これらのものはその時々読書、物語と深く結びついている。本を介しての様々な人々との交歓もそう。そしてそれらのことがらや人々が、読書という経験を特別なものにしていく。



本と私

小湊 博美

いつの頃からだろう、身近に本があるようになったのは。小学生の時分には、外で遊ぶよりも家で本を読むことが多かった記憶がある。家にお客がみえた時、挨拶もせずひとり縁側で本を読み耽っていたら、母からこっぴどく叱られた記憶がある。それぐらい私にとって本は魅力的なものであった。時間や現実を超えて、独自の世界が広がる感じがした。

誰にでもお気に入りの一冊、忘れられない本があると思う。私の場合は、「セロ弾きのゴーシュ」「赤い靴と少女」「風は思い出をささやいた」という絵本/童話である。猫や鳥に会うとセロ弾きのゴーシュを思い出し、海を往来する船を見かけると赤い靴で踊り続けた女の子を思う。頬を撫で

る風に「風は思い出をささやいた」の滝沢二郎さんの挿絵が目に浮かぶ。いくつになっても題名を耳にすると、幼少時に読んだ本の世界が、あの時の、あの色合いのまま、目の前に広がる。音や香りも思い出されたりする。今、書店で同じ題名の本を手にしても、ストーリーは変わらずとも全く違う本に見えてしまう。それほどに本に出会った時の印象は強烈にその人の中に残るといえる。

本は文字情報だけであるが、読み手に世界を描かせる力がある。文字を読み、読み手が映像や空間、彩り、音、光、時には風までも描いていく。本は想像力を育み、それは創造する力へ繋がっていく。人生の師と仰ぐ90歳代の方が「読書は飽くことがない。知りたいこと・調べたいことが沢山あって、それをわかるために本を読む。」と語った。それぞれの本の楽しみ方があるのだと思う。本を身近な友として、これからは未知の世界や自分にはない考え方・物事の捉え方に出会っていききたい。





Book Review

おすすめの本を紹介していただきました 《学生編》

『舟を編む』 三浦しをん著 (光文社)

図書館所在 1F和書 913.6 MI

皆さんは、友だちと話すときにどのようなことに気を付けていますか。友だちに笑ってほしくて面白く話す人や、正直にありのままの気持ちを伝える人、もしくは、相手の様子を伺って本音とは違うことを話す人など、それぞれの性格や考えに合わせて話していると思います。私自身は、幼いころから「言葉」というものに興味があったので、細かい所まで気にしながら話していました。身近なことで言えば、友だちにメッセージを送るときは、同じような意味でも選ぶ「言葉」によって印象が変わるので、どの「言葉」にしてどの語尾にするかを考えたり、相手の頭の整理をしやすいうように伝える順番に気を付けたりすることが無意識のうちに当たり前になっていました。自分から何かを発信する際には、頭の中でよく考えてから、細心の注意を払って発信していたので、とてもエネルギーを使っていました。そんな私が、大学では言語系の学科に入り、日本語とともに、外国語の面からも「言葉」と向き合う機会が増えるようになりました。外国語も同じように、選ぶ単語でニュアンスが変わることもあったり、その国ならではの価値観からくる「言葉」への配慮も学んだりすることができました。また、そんな中でこの本と出会うことができました。

この本の大まかなあらすじは、

ある辞書編集部の「大渡海」という辞書が、13年かけてようやく完成する中で、それぞれのキャラクターの目線に立って人生や生き方と照らし合わせながら、構成されている物語です。例を挙げると、「辞書作りが自分の最後の使命だ。」と信じた荒木公平は、この辞書の立案者の辞書に対する愛を聞いて、周りの人々に支えられながらも彼なりのやり方で成長していく話があります。他にも多様な立場のキャラクターが年月とともに変化する立場の中での成長も描かれています。

私が一番印象に残った一文は、「言葉があるからこそ、一番大切なものが俺たちの心のなかに残った」という一文です。どんな言葉でもかけがえのないもので、それは一度発したら取り消すことができないものだと思います。私たちは、言葉によって傷つけられ、そして励まされて生きています。これから人生を歩むときに、一度「言葉」というものに人生を懸け、こだわり、熱く向き合ったこの物語を読むことで、一つ一つを大切に受け止めることができるような人になれると思います。皆さんも、ぜひ読んで自分自身の「言葉」と向き合ってみてください。

ことばと文化学科4年 宮野 ころ



『旅猫レポート』 有川浩著 (講談社)

図書館所在 1F和書 913.6 A

野良猫だったナナは、交通事故をきっかけに助けもらったサトルと暮らすことになった。それから5年後、ある事情でサトルはナナを手放さなければなら

ないことに。サトルとナナは、新しい引き取り手を探す「最後の旅」にでる。その一つ一つの旅がサトルとナナにとって大切な思い出になる。引き取り手候補の友人たちや叔母のもとを訪れる中で、サトルが今まで生きてきた道をたどる旅となる。友人たち、叔母、ナナ、それぞれの視点でサトルの生き様が語られており、読み進めていく中で、私はサトルの人柄に心惹かれた。サトルは、小学生の頃に大事に育ててくれた両親を交通事故で亡くしている。しかし、そんな不運な境遇を感

じさせない明るく穏やかな性格で、誰よりも人の幸せを願っているサトルに胸が熱くなった。そんなサトルだからこそ、たくさんの人たちに愛され、友人たち、叔母、ナナと素敵な関係を築くことができたのだと思う。また、旅の中で友人たちや叔母の人生に影響を与えていく姿が魅力的だった。サトルは周りを幸せな気持ちにすることができる素敵な心の持ち主だと感じた。

私はこの本を読んで、今までお世話になった人たちに会いたくなかった。そして毎日の何気ない日常がどれほど幸せなことなのかを痛感した。そして人との関わり合いを大切に、今を大切に生きていこうと思った。あなたにとって大切な人は誰ですか？

看護学科1年 木山 良菜



『宇宙兄弟』 小山宙哉著（モーニングKC 講談社）

幼少時代、南波兄弟は月へいくことを約束した。

ドーハの悲劇が起きた日に生まれし兄・六太と、野茂がメジャーでノーヒットノーランを達成した栄光の日に生まれた弟・日々人。それから20年後、約束通り宇宙飛行士となり、日本人初の月面着陸者となった弟。その時兄の六太は、リストラにあい途方に暮れていた。兄とは常に弟の前を歩いていなくてはならない、だがしかし今更弟に追いつくには遠すぎると悩んでいたその時、JXSAから一通の手紙が六太宛に届いた。そこには六太が思ってもいなかった内容が綴られていた……。

主人公の兄・六太は不器用で、自己評価が低く、ネガティブ思考ですが、発想力は人一倍優れていて、なぜか人を引きつけるオーラがあり、人に愛される存在です。また、同じ職場のせりかさんに恋をしている姿もどこか危なっかしく、可愛らしく、もどかしくて応援したくなってしまう。如何なる時も人を信じ、真っ直ぐに生きていく彼の生き様はとて男らしくてかっこいいです。

人生について悩んでいる人や、夢が見つからなくて悩んでいる人、あの頃の自分に戻りたいと願う人、また一歩前に踏み出す勇気が欲しい人にこの作品を是非読んで頂きたいです。

「ちょっとだけ無理なことに挑戦していこう」「迷った時は、どっちが正しいかではなく、どっちが楽しいかで決めてみよう」そんな風に思えて、やる気が漲ってくると思います。

また夢を諦めそうになった時、私は『宇宙兄弟』に出会いました。夢を見るきっかけは好奇心や憧れであったことを思い出させてくれ、「悩むなら、夢を叶えてから悩もう」そう教えてくれたのも『宇宙兄弟』でした。

小山宙哉先生の絵はタッチが繊細で、綺麗な構図で読みやすく、躍動感があるので読み応えがあります。また、自身が宇宙飛行士として危険に立ち向かっているかのようにハラハラ、ドキドキ出来ますので是非一度手に取ってみてください。

こども学科3年 寶藏彩恵



『スタートライン：一歩踏み出せば奇跡は起こる』 喜多川泰 著
(ディスカヴァー・トゥエンティワン)

図書館所在 1F和書 913.6 KI

「本気でやれば何だって面白い。

そして、本気でやっているものの中にしか、夢は湧いてこない。夢はそこらへんに落ちているものではない。夢を探すという言葉を使う人がいるが、探しても見つかりっこない。見つかるのはせいぜい、儲かりそうな職業や、これならやってもいいかなと思える仕事にすぎない。夢というのは、自分の内側にしかないものなんだ」「目の前のことに本気で生きれば、奇跡が起こる。でも、本当は、それは奇跡ではなく、当たり前のお会いなんだ。本気で生きる人には、必ずその夢の実現を応援する人が現れる」という言葉が出てきてとても印象に残った。作者が読んでいる人に、夢に向かって一歩を踏み出すこと、計画ではなく情熱をもって行動し続ける勇気を持つことが大切だと感じたからだ。

この本から学んだことは、好きなこと、やりたいこと、足りないことがあるなどと悪く考えて諦める理由にしない。できなければこれからできるようにすればいい。まずは第一歩。若い人に諦めること

やできないことを教えるよりも希望や可能性を感じられるようにすることだと考える。あとがきにあるように「よい本と出会っても、自分が何もしなければ、出会っていないのも同じだ。よい本と出会ったら、必ず何か行動を起こして、この本と出会ったから今の自分があるという状態をつくらなければならない」このフレーズがまさにそうだと感じさせるものだった。本から得た財産を自分はどう生かしているのだろうかと思いつつ一瞬考えてたが、日頃から何気ないところで役だっているということに気づくことができた。本を読む機会は減ってきているが、読書っていいなと改めて感じることもできた。

今やっていることが将来どんな風になっているか想像できないが、社会で働き始めたときあのときちゃんとしていてよかったと思えるように残りの学生生活を過ごしていきたい。また、夢に向かって努力していきたいと思った。

健康栄養学科2年 追田 瞳

私にとっての図書館



大学院
草留 早紀子

User's Voice

く通うようになった。大学院生になっても、レポートや講義の発表用にたくさんの本を借りる。図書館は院生室から少し離れたところにあるため、行くときはちょっとした散歩になる。ちょっと遠い距離を、景色を見ながら歩くことで気晴らしになり、心がリフレッシュされる。そして、図書館に入ると、本の匂い、静かな空間が私を迎えてくれる。その感じが私にはどこか懐かしく、ほっとするのだ。

館内でレポートや勉強のための本を探す時は、宝探しのような気持ちになるし、自分の読みたい本が見つかった時は、道端に綺麗な花が咲いていたのを偶然見つけた時のような高揚感がある。没頭して本を探していると、時間があつという間に過ぎてしまい、いつも長居してしまう。さらに、あれもこれもと本を集めていると借りすぎてしまう。そして、図書館からたくさんの本を持って院生室まで帰る道は心が満ち足りていて、いい気分になる。

私にとっての図書館はそんな場所なのだ。

私にとって図書館は“心落ち着く場所”である。小さい頃からよく母親と図書館に通っていたせい、図書館に行くことは日常的なことで、寧ろ楽しみな時間であった。小学生の頃も毎日図書館に通い、好きな本を1冊ずつ借りていた。しかし、中学生の時は図書館に足を運ばなくなり、高校生になると、本を借りるというよりも図書館の自習室で勉強や宿題をすることが主になった。

大学に入学し、レポートを書くために必要な本を借りに、そして、課題を行うために図書館に再びよ



著書を寄贈していただきました！



山口明美先生より
(こども学科)

『小学校家庭科の授業をつくる：理論・実践の基礎知識』 中西雪夫他編
学術図書出版社，2017
ISBN：9784780605402

図書館所在 1階和書 375.52 NA

山口先生は、第Ⅱ部第6章第4節「家庭科の学習指導案の構成」、第5節「家庭科における学習指導方法」を執筆されています。教職を希望されている方には是非おすすめしたい1冊です。



尾曲巧先生より (ことばと文化学科)

『西郷に抗った鹿児島土族：薩摩川内平佐の民権論者、田中直哉』 尾曲巧著
南方新社，2018
ISBN：9784861243813

図書館所在 1階郷土資料 219.706 0

『海の縄文文化：日本人の“とりなし”のころのゆりかご』 尾曲巧著
南方新社，2018
ISBN：9784861243912

図書館所在 1階郷土資料 210.25 0

尾曲先生は2018年10月にご病気のためこの世から旅立たれました。この2冊は闘病中に執筆され、研究者であり教育者としての人生を最期まで全うされた先生の想いが込められています。是非お読み下さり、先生のご冥福をお祈りしましょう。

図書館長の冒険 シーズ①

「先生！あそこに人がいる！」とあるクラスでの学生のひとことから、教授の冒険心は芽生えた。「あそこ」とは、図書館棟の時計台の上の小さな窓。「あそこ」へ行くにはどこから行けばよいのか、皆目検討がつかない。そもそも人が入れるなどと聞いたこともない。

あれから数年の歳月が経ち、教授には『図書館長』の椅子が与えられた。

「あそこ」への道への冒険心が再燃した。

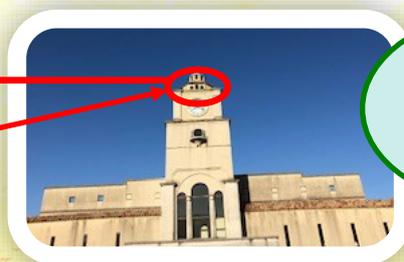
「学生が“先生！あそこに人がいる！”って言ってたんだけど、人が入れるの？」と、まるで学生の代わりに尋ねてあげたかのように図書館スタッフに話した。その時の少年のようなキラキラした瞳が、「あそこに行ってみたい」と語っていた。キラキラした瞳を曇らせてはいけない。とっさに「おそらく行けますよ！行ってみますか？」と図書館スタッフ。「もちろん」と、そのキラキラした瞳が答えていた。

長い間温めていた「あそこ」へ行ってみたいという夢が叶う時がきたのだ。

こうして、図書館長の冒険への扉の鍵が開けられた。



ココ



先生！
あそこに
人がいる！



※残念ですが学生さんは入れません

純心 * アート ギャラリー

図書館棟2階の回廊のアートギャラリーの絵画をゆっくり鑑賞されたことがありますか。興味を持っていただくこと企画し、図書館報で1作品ずつ紹介していきます。シリーズ第3作品目は、「鶉の聖母」です。



「鶉(ひわ)の聖母」

Madonna del cardelino

ラファエロ・サンツィオ
Raffaello Sanzio (1483-1520)

ウフィツィ美術館蔵(フィレンツェ) 
1506年頃 油彩 板

ラファエロの作品を知るために…

- ・『聖母マリアの美術』、諸川春樹、利倉隆著 美術出版社、1998年
- ・『ラファエロ』、クリストフ・テーネス著 TASCHEN、2006年
- ・『世界美術大全集12』、久保尋二ほか責任編集 小学館、1994年
- ・『愛の聖母子』木崎さと子著、講談社、1988年
- ・『ラファエロ：作品と時代を読む』越川倫明ほか著、河出書房新社、2017年
ほか

純心アートギャラリーの「鶉の聖母」は聖母だけの部分絵ですが、ここでは絵が持つ意味をみていくため全体を紹介しました。三角構図で描かれたこの絵は安定感があり、平穏な母子の絵に見えます。しかしこの平穏な絵の中にはキリストの受難が徴されているのです。聖母の膝元に描かれた洗礼者ヨハネの手には鶉が描かれ、イエスはそれに手を差し伸べています。鶉がキリスト教において受難を象徴する鳥であることから受難を受け取り、人類の救いのために生涯を捧げる幼子イエスの姿をみることができます。



お知らせ

古本募金のご報告

古本募金を開始して2年目となりました。昨年に引き続き、今年も沢山の本を寄付していただきありがとうございました。いただいた古本は換金され「純心未来基金」へ積み立てられ、学園の教育・研究のために役立てられます。これからも宜しくお願いします。

2018年度 寄付金額合計	167,490円
(内訳)	
大学の除籍本・回収ボックス	153,976円
卒業生・保護者・旧職員ほか	6,976円
鹿児島純心女子短大図書館	4,738円
きしゃぼん(嵯峨野株式会社)	1,800円



入館ゲートが変わりました

9月に入館ゲートの入れ替えを行いました。新ゲートは入館時に学生証(教職員はLibrary Card)が必要です。安全な図書館で安心して過ごせるように、セキュリティを強化しました。入館の際に一手間かかりますが、ご理解とご協力をお願いします。

学生証を忘れたときは職員に声をかけて下さい。



卒業後も利用できます

在学時より利用制限はありますが、貸出も可能です。ご利用下さい。(※貸出冊数5冊、貸出期間2週間)
大学に来られたら、まず大学の受付で入館の手続きを行って下さい。その後、図書館へお越しください。皆様のご利用をお待ちしています。

編集後記

今年度は平成最後の年度であり、今年5月から新元号に改元されるので、このVeritas No. 8が平成最後の発行となります。館長の巻頭言の中には50字余りの様々な『時』が綴られています。遠い昔から時が刻まれ、今に至り、人々の身にも心にも凄まじい思いを抱かせた東日本大震災から8年の時が過ぎました。各学部の先生方や学生さん方からBook Review等に投稿された10篇の文章は、平成30年度を背景とした内容であると感じています。「茶道から生きる道を」「時代を生き抜いた人」「身近な友としての本」「家族との仲で経験された読書の思い出」等の先生方の語りが寄せられ、学生さん方からは、本を読むことで「言葉とは・人との関わり方・夢を見る・本気で勇気を持って生きる」等の文章が投稿されています。図書館は心落ち着く場所であり、宝探しのような気持ちになる場所です。皆さんが図書館を後にする時、気分爽快な思いで次の元号へ大きな希望を託して邁進して下さいを切に希望しています。(FT)



鹿児島純心女子大学附属図書館報

VERITAS vos liberabit No.8

編集・発行：図書館運営委員会

発行日：2019年3月14日

〒895-0011

鹿児島県薩摩川内市天辰町2365番地

TEL：0996-23-5311 / FAX：0996-23-5030

E-mail: veritas@jundai.k-junshin.ac.jp